

現代名詩選(下)

伊藤 信吉 編

新潮文

げん だい めい し せん
現代名詩選
下 卷

定 価 280 円

新潮文庫 草 205 C

昭和四十四年八月二十五日 発行
昭和五十六年七月二十五日 十七刷

編 者
伊 藤 信 吉

発 行 者
佐 藤 亮 一

発 行 所
株 式 会 社 新 潮 社

郵 便 番 号 一 六 二
東 京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
電 話 業 務 部 (〇三)(二六六)五一一
編 集 部 (〇三)(二六六)五四四〇
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

現 代 名 詩 選

下 卷

伊 藤 信 吉 編



新 潮 社 版

1891

目

次

西脇順三郎	九
安西冬衛	二九
北川冬彦	三六
村野四郎	四四
北園克衛	六一
竹中郁	六九
田中冬二	七六
笹沢美明	八八
菱山修三	九六
三好達治	一〇三
丸山薫	一二二
伊東静雄	一三七
中原中也	一四六

立原道造	一六〇
津村信夫	一七一
木下夕爾	一七九
蔵原伸二郎	一八七
岡崎清一郎	一九三
大江満雄	二〇三
伊藤整	二一一
井上靖	二三〇
高見順	二三〇
嵯峨信之	二三六
秋山清	二四七
会田綱雄	二五七
田村隆一	二六七

現代名詩選 下卷

にしわきじゅんざぶろう
西脇順三郎

天 気

(覆^{くつがえ}された宝石) のような朝
何人か戸口にて誰かとささやく
それは神の生誕の日

雨

南風は柔い女神をもたらした
青銅をぬらした 噴水をぬらした

明二七・一(一八九四)——新潟県に生る。慶応義塾大学理財科卒。留学生としてオックスフォード大学に英語・英文学を学び、帰国して慶大文学部教授となる。滞英中に英文詩集『Spectrum』を刊行。昭和三年ころから超現実主義詩論と作品を盛んに発表し、「詩と詩論」「文学」「詩法」等の中心的存在の一人となった。詩集『Ambarvalia』『旅人かえらず』『近代の寓話』『第三の神話』『失われた時』『禮記』等のほか、詩論、文学論集が数多くある。

ツバメの羽と黄金の毛をぬらした
潮をぬらし 砂をぬらし 魚をぬらした
静かに寺院と風呂場と劇場をぬらした
この静かな柔い女神の行列が
私の舌をぬらした

太 陽

カルモジインの田舎^{いなか}は大理石の産地で
其処^{そこ}で私は夏をすごしたことがあった
ヒバリもいないし 蛇^{へび}も出ない

ただ青いスモモの藪^{やぶ}から太陽が出て
またスモモの藪へ沈む
少年は小川でドルフィン^{とら}を捉えて笑った

眼

白い波が頭へとびかかってくる七月に
南方の綺麗^{きれい}な町をすぎる
静かな庭が旅人のために眠っている
薔薇^{ばら}に砂に水
薔薇^{かす}に霞む心
石に刻まれた髪
石に刻まれた音
石に刻まれた眼は永遠に開く

皿

黄色い堇^{すみれ}が咲く頃の昔
海豚^{いるか}は天にも海にも頭をもたげ
尖^{とが}った船に花が飾られ
ディオニソスは夢みつつ航海する
模様のある皿の中で顔を洗って
宝石商人と一緒に地中海を渡った
その少年の名は忘れられた
麗^{うららか}な忘却の朝

セーロン

土人はみな家にはいつている
炎天に僕はひとり歩いた
土管の上にトカゲがいた

茄子が光っている
 堇は燃えている
 堇の葉の上にたまっている熱い砂が
 手の甲にふりかかる
 セーロンの昔

旅人かえらず (抄)

旅人は待てよ
 このかすかな泉に
 舌を濡らす前に
 考えよ人生の旅人
 汝もまた岩間からしみ出た
 水霊にすぎない
 この考える水も永劫には流れない
 永劫の或時にひからびる
 ああかけすが鳴いてやかましい

時々この水の中から
 花をかざした幻影の人が出る
 永遠の生命を求めるは夢
 流れ去る生命のせせらぎに
 思いを捨て遂に

永劫の断崖より落ちて

消え失せんと望むはうつつ
 そう言うはこの幻影の河童

村や町へ水から出て遊びに来る
 浮雲の影に水草ののびる頃

暮れるともなく暮れる

心の春

行く道のかすかなる
 鶯の音

*

藪に花が咲く頃

心はくもる

*

昔の日

野ばらのついた皿

廃園の昼食

黒いてぶくろ

マラルメの春の歌

草の葉先に浮く

白玉の思い出

無限の情

*

思いはふるえる

秋の野

都に居る人々に

思いは走る

うどの花が咲いていた

都の人々はこの花を知らず

*

武蔵野を歩いていたあの頃

秋が来る度に

黄色い古さびた溜息の

くぬぎの葉をふむその音を

明日のちぎりと

昔のことを憶う

二三枚の櫛の葉とくぬぎの葉を

家にもち帰り机の上に置き

一時野をしのぶこともあった

また枯木の枝をよくみれば

既に赤み帯びた芽がすくみ出ている

冬の初めに春はすでに深い

樹の芽の淋しき

*

あの頃のこと

むさし境^{さかい}から調布へぬける道

細長い顔

いぬたで

えのころ草

*

坂道で雉^{きじ}の声をきく

*

夕顔のうすみどりの

扇にかくされた顔の

眼^{まなこ}は李^{すもも}のさけめに

秋の日の波さざめく

*

秋の日も昔のこと

むさし野の或^ある村の街道を歩いていた

夕立が来て或る農家の戸口に

雨の宿りをした時に

家の生垣^{いけがき}に

かのこという菓子に似た赤い実

がなっていた

「我れ発見せり」と思った

それは先祖の本によく出てくる

真葛^{まのかずら}とか美男葛^{びなんかずら}というもの

その家の女にたのんで折り取った

女は笑う「そんなつまらないもの」

をと だが

心は遠くまた近い

*

露にしめる

黒い石のひややかに

夏の夜明

*

庭の

蟬殻^{せみがら}の

夏の夜の殻の朝

悲し

*

とき色の幻影

山のあざみに映る

永劫えいごうの流れ行く

透影すきかげの淋しき

人のうつつ

あまりにはるかなる

この山影に

この土のふくらみに

ゆらぐ色

*

人間の声の中へ

楽器の音が流れこむ

その瞬間は

秋のよろめき

*

斑猫まだらねこの出る街道を

真向まかむきに茜あかねを受け急ぐ

尖塔せんとうの町に行きつかず

茶の生籬いけがきと南天なんてんの実のみつづく

やがて

まきのまがきから顔を出した

女に道をきいてみた

正反対に歩いたのだ

「まっすぐに戻られよ」

*

永劫えいごうの根に触れ

心の鶉うすらの鳴く

野ばらの乱れ咲く野末のすえ

砧きぬたの音する村

樵路しょうろの横ぎる里

白壁のくずる町を過ぎ

路傍の寺に立寄り

曼陀羅の織物を拝み

枯れ枝の山のくずれを越え

水茎の長く映る渡しをわたり

草の実のさがる藪を通り

幻影の人は去る

永劫の旅人は帰らず

山櫨の実

なぜ私はダンテを読みながら

深沢に住む人々の生垣を

徘徊しなければならぬのか

追放された魂のように

青黒い尖った葉と猪の牙のような

とげのある山櫨の藪になっている

十月の末のマゼンタ色の実のあ

山櫨の実を摘みとって

蒼白い恋人と秋の夜に捧げる

だけのことだ

なぜ生垣の樹々になる実が

あれ程心をひくものか神々を貫通

する光線のようなものだ

心を分解すればする程心は寂光

の無にむいてしまうのだ

梨色になるイバラの実も

山櫨の実もあれ程 *Romantique* なものはない

これほど夢のような現実はない

これほど人間から遠いものはない

人間でないものを愛する人間の

秋の髪をかすかに吹きあげる風は

音もなく流れて去ってしまう